

講 読

第十一回

石上露子 自伝「落葉のくに」(石上露子集二五頁、二六頁)  
会員 奥村和子

悲恋の傷の淵から咲いた文学の花

この時期は日露戦争開戦 明治三七(一九〇四)年 から露子の結婚 明治四〇(一九〇七)年までで、すでに発表の場を得ていた『婦女新聞』『婦人世界』や『明星』に最も多くの歌や随想を投稿している。女性向けの啓蒙誌、新鋭の文芸誌という違いはあるが、三誌に共通するのは、旧弊な家の重圧を批判し、人間解放の個々の思想を唱えているところである。家の存続のために恋人と別離して悲嘆の淵にいた露子が、その魂の結実を発表するにふさわしい場を得たわけだ。泥田を這うような苦しみの中から文学は生まれたのだから。

父団郎に溺愛された露子(きつな 一三五p、一三六p他)

父との深い絆ゆえに家を捨てられなかった露子

実母は去り、妹清は没し、露子は「父ひとり子ひとりの強いきづなにしつかりと結ばれる」と書いている。父団郎は「桜おち葉」の項によると、風格ある文字を書き、俳句を嗜む文化人、露子は敬愛していたらう。「土地解放論や富の分配、主義者達のあげつらふそんな書物を喜んでおよみになるお父様」と進歩的な父を描いている。そんな父なのに「たつた一つ、たつた一つだけではどうしても時代の差とでも云ふのか」許してくれないことがあった。地主の家長である父は、婿をとり杉山家を継ぐことを露子に求めた。露子は父との絆の強さゆえに、父の意志にそむけなかったのだから。

上京して与謝野夫婦、『婦女新聞』の友と会う。

(「桜おち葉」一三三p、一三四p)

明治三八(一九〇六)年、露子二十四歳(満年齢・以下も)の秋、郡長の誘いで東京上野での日赤総会に出席することになった。あれから五年、恋人長田正平に案内されて逍遙した、思ひ出の森かげにさびしうひろひさくら落葉のいくひらをながき袂にそとたゞひめて」と露子は記す。総会出席の夜、電話のかかってきた相手は「萬朝の田中万逸様」とあるが、「報知新聞記者」の誤りであると、後に田中氏が語っている。田中万逸氏は、露子と同年に富田林町に生まれ、若き日には泉鏡花門下の文学青年で、戦前から国会議員として活躍した政治家だ。戦後は好彦の相談相手になっている露子ゆかりの人である。

次の日露子は菊を抱いて「新詩社」を訪問し、与謝野一家と語りつた「しみじみと忘れぬ一日」を過ごす。白菊と愛称し、その才能を見いだしていた深窓の麗人の出現に、鉄幹・晶子は歓迎したであらう。

「夜は上野の森のあなた」に出かけ、小原無絃という翻訳家の家で、『婦女新聞』の関係者に会っている。小原と同居していた米谷照子、露子とは投稿仲間、姉とよび妹と称し親密な文通を交わしていた人だ。のち金銭をねだる照子と疎遠になったが、『婦女新聞』記者の下中弥三郎も同居している。文中「すみこさま」と記されている

るのは、記者の島中雄三のことで、露子に恋慕した詩を残している。新しい時代を生きている彼らとの会合は、余程熱中したのだから。露子が宿に帰ったのは「夜半の二時まへ」と書かれている。閉塞した南河内の旧家から出てきた露子の精神を揺り動かす刺激的な時間であったのだから。

わたしは幸福すぎる 革命の火はとほい遠い 山のかなた

『平民新聞』と露子 (羅綾の袖一二八p、一三〇p)

豪華な「調度や衣装」に囲まれた大地主の何不自由ないお嬢様である露子は「わたしは幸福すぎる」といい、が「はたしてこれなのか」と問いかける。露子の胸の奥で聞く「するどい声」とは何なのか。杉山家に残されていた露子の遺留品の中に、幸徳秋水著の『平民主義』があったという。楽天的な社会主義者であった秋水は「今の時代は革命の時代也」という。しかし、自らの人生の選択さえままたない露子にとって、明治の絶対制国家を支えた「家」という壁は、「あまりに高きに過ぎる」のであり、ただ「おとなしうひるがへすべき羅綾のたもと」なのであった。それゆえ露子にとつて「革命の火はとほい遠い 山のかなた」なのであった。

続いて、大地主杉山家に年貢米の運ばれてくる光景が叙述されている。「きのふについで今日はまた某村の年貢取、納米日、数人の手代と下男は早朝からその支配人の宅へ。やがて続々とこぼれてくる米俵の山の車、五台、十台、夜に入ってもまだつゞく。運賃の支払い、再度の品質検査、提灯の火が右往左往する。」地主の娘である露子は上段の間から、この「華やかな光景」を、小作人たちの瘦せて汚れた身体や流れる汗を見ていたのだから。そして「かうしたかげにもよんだ様な悲惨な事柄が起きてあなければいいが」と叙す。



この場面の露子の目は、地主のお嬢様の目ではない。お嬢様なら、ぜいたくな暮らしは当然で、小作人の労苦に思いを馳せることはない。ましてや、米の出来高の五割の小作料を搾りとり、地主の暮らしがなりたつていくという認識はなからう。

小作人の悲惨な事柄を知った「もので読んだ」とは『平民新聞』のことであつたらう。農村での地主制度の矛盾の解消を主張していた新聞である。

この項の最後に置かれた歌「みいくさにこよひ誰が死ぬさびしみとかみ吹く風のゆくへ見まもる」は露子の代表的反戦歌あるいは厭戦歌といわれている歌である。この歌が、今も人の心をうつのは、天下国家に命を捧げた名誉の死を讃える歌ではなく、ひとりの兵卒の死を悲しむ妻や母の思いを歌っているからなのである。私的な真情を詠った叙情歌なのだ。

日露開戦時、ジャーナリズムはこぞって国民の戦意をかきたてた。民衆はそれに踊った。露子と同年代を生きわたしたの祖母も誇らしげに、富田林町の豪商の提供する祝い酒を飲み歩いた百姓の無礼講を、私に昔語りした。あの露子の父も「杉山団郎氏を盟主とし

て奉公義会ができました。日清日露でお世話下さいました」(中井亀太郎・松本和男宛書簡)とあるような様だった。百年後の我々だって、国益というコトバに踊らされている始末だ。こんな風潮のなかで露子の歌の個の輝きはどこから生まれたのか。生来のヒューマンな性情ゆえというだけでは説明し切れない。明治三六(一九〇三)年に創刊された週刊『平民新聞』は、非戦の論陣を張っていた唯一のジャーナリズムであった。露子がこの影響をうけて、彼女の感性に再生させ、「みいくさに」の歌としたのではないか、と思う。

竹久夢二にもうった扇子 大逆事件と石上露子

(「桜おち葉」一三四p、一三六p)

あの哀愁にみちたおおきな目の美人画で今も私たちを魅了する竹久夢二の絵。露子は扇子に描いてもらったという記述がある。露子が上京して？夢二が富田林にきて、あの首待ち草咲く石川を散策して？わたしの空想はひろがる。「夢二さんが書いて下さった二本の女扇子は恋の詩と石川の月見ぐさ。私はこんなのよりいつもの平民新聞のさし絵のやうな胸をうつ。」露子の望んだのは、日刊『平民新聞』明治四〇年四月四日の「親は故郷にわじや嶋原に桜花かやちりぢりに」と添え書きされているやうな、身売りされた遊女の悲哀を描いた絵である。夢二は、官憲によつて廃刊させられた週刊『平民新聞』を継承する『直言』や日刊『平民新聞』に時代を諷刺する作品を掲載している。露子もそれらを購読していた。晩年家永三郎氏との往復書簡でそのことに言及している。

宮崎民蔵(「宮崎滔天」と書かれているが)が杉山家を訪問し、露子は明治四〇年五月に「土地復権同志会」に加盟している。地主制度を批判する団体である。日刊『平民新聞』の後を継いで、森近運平や宮武外骨は『大阪平民新聞』を発刊した。この時も露子は資金援助している。森近運平はあのかの多くの思想家や文学者を震撼させた大逆事件で処刑された人物であった。(冤罪であったが)大逆事件の取調官は、露子が「金百円寄せ」たことを記録している。

露子は次のように書く。「平民新聞が配達されると云ふだけでそのそのずの眼が光る。人のこころをばやめられる。今日も警察署長が来訪、いたづらつ児の火なぶりの様に云はれる。露子は言う「もつともつこの問題を得心のゆくまでほりさげて自分の物にして見たいからなのだ。」しかし露子はこの問題を探索し続けることなく筆を折った。晶子や啄木のように、大逆事件を歌うこともなかった。

わたしは気になる。なぜ大地主のお嬢さんが、この時代の社会主義に接近したのか。金持ちのインテリにありがちな「かぶれた」などという一過性の慈善的な心情なのだろうか。露子の恋は、命がけの恋であった。意に添わない結婚前夜の歌の激しさを詠むがいい。ほむらの中に立ち、抜け殻になった女がいる。筆を折って二十三年後の「冬柏」に載せられた切々たる恋歌、晩年の歌をみるがいい。

露子はその恋を奪ったもの、の正体を見極めようとしていたのだ。孤独な魂、乾いた魂の砂に染みとおる時代の知性。美しい叙情の奥に光っていた知性のかげやき。露子のもとめた人間解放の精神は百年後の女たちにひきつがれている。

参考文献 松本和男、評伝石上露子、石上露子をめぐる青春群像上下、他

### 石上露子の歌碑除幕式（没後五十年）

伏谷勝博氏（エッセイスト）



富田林市出身の歌人・石上露子（本名杉山タカ）の没後五十年を記念して、その歌碑が縁りの地高貴寺（河南町）に建立され、命日の十月八日に除幕式が執り行なわれた。

この事業は、「石上露子を語る集い」のメンバーが企画され、広く募金をつとめて進められてきた。私は著書（河内つれづれ）の中で寺内町と石上露子に触れたのがきっかけで、募金に賛同し、ひょんなことから郷土の書家永田峰亭氏を揮毫者に推薦し、実現することとなった。その縁で本日の除幕式に参列することとなった。

秋台風十八号が本土に急接近し、上陸が不可避となり、昨夜来紀伊半島を直撃するコースを辿ったので、夜半から早朝にかけて関係者はその進路に一喜一憂していたが朝方にはやっと東方面を通過したので式典は予定通り実施となった。私は自動車を走らせ、数年振りに高貴寺を訪れた。河南町平石地区の集落を通過して、葛城山の山麓にあるお寺を目ざして山道を登っていった。駐車場に自動車を停めて坂を登り境内へ入った。雨あがりの境内は地面は柔かかったが、周囲の木立は雨滴を受けて緑が鮮やかに冴えて感じられた。本堂の脇の格好の場所に歌碑は建てられ、白布で覆われていた。

本堂にお参りした後、「石上露子を語る集い」の役員の方と挨拶を交わし、お寺の本坊でおうすを頂きながら、開式迄の間しばらく待つことにした。この席で、会の代表宮本正章氏と露子の和歌について、また出版社「竹林館」の社長で現代詩人の左子真由子氏のことなどについて話があった。

高貴寺の本坊内に上らせていただくのは初めてだったが、古い建物の各部屋には、当寺中興の祖といわれる慈雲尊者の書が沢山掲げられていた。慈雲の書は独特の書体で、



除幕式当日の歌碑

上手下手を論じる対象ではなく、僧慈雲の奥深い理想や精神を力強く筆先に込めて紙にぶつけたようで、書というよりは精神そのものというか、魂がほとばしったような強い力を感じさせた。その迫力と奥深い力に魅せられた。独特の書体なので私の力では読みこなすのはむづかしかつた。永田峰亭氏に解説していただいた。

控室には、高貴寺住職初め、杉山家の遺族代表、地元河南町長、同教育長、永田峰亭師、石上露子を語る集いの代表以下の役員、会員など縁りの者が三十名ばかり参集していた。

葛城山麓の静かで森韻とした高貴寺境内の本堂脇で、定刻通り除

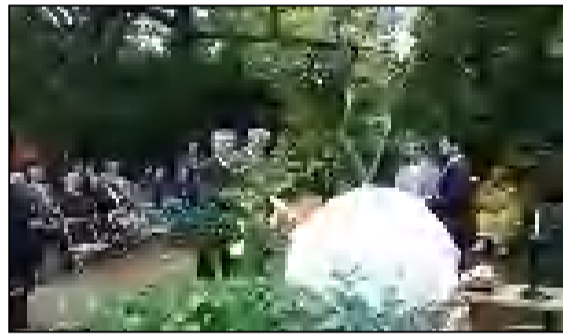
幕式の式典が始まった。最初に、「語る集い」の会代表の宮本先生が挨拶に立ち、歌碑建立に至った経過から、歌碑に選ばれた和歌人の世の旅路のはての夕づく日あやしきまでも胸にしむかな

返りつつの心境を、みずみずしい感性でもって夕景の心象イメージを詠んでいると、更に建立場所を高貴寺に求めた経緯などが懇切に説明され、最後に「あなたとあなたの文学に思慕を寄せる私たちの行為を、安らかな心で受け取って下さい」と呼びかけて結ばれた。

次いで、河南町の武田町長が挨拶された。更に、住職による入魂式、和歌の朗詠、会員による菊花の献花、感謝状の贈呈と続いた。感謝状の文章がそれぞれの立場に応じた意を尽した表現となつていのが良かった。

除幕式のあと、本堂裏の山腹の墓地に眠る杉山孝子（石上露子）のお墓に全員がお参りをし、住職の読経の下にお線香を手向けた。墓石の側面には自分より早く逝った二人の子息の銘も刻まれていた。これで式典は滞りなく終了した。

台風通過後の山の天気は晴れ、老木に囲まれ森韻として、ときどき小鳥のさえずる山深い静寂な雰囲気の中で、式典は厳粛に執り行なわれ、参列者一同感銘を受けた。



除幕：左から宮本代表 永田峰亭氏 古家真一氏 武田勝玄町長

除幕された歌碑は、少し赤味があった石に峰亭師が揮毫された文字が白色に鮮やかに浮き立ち、周りに趣きを添えていた。これで高貴寺の観光ポイントが一つ増えた気がした。万人に解り易い字体をとの会の注文により、筆を執られた峰亭師の書は解りやすく、流石がと思わせる出来栄であった。ご本人は変体仮名などを使ったもの少し藝術的な書体を考えておられたようだが、仕上りはこれで良かったのではなからうか。

建立された歌碑は長く後々まで残る。揮毫された峰亭師は亡くなられても、この歌碑とともにその名は残る。これは峰亭師にとっても名譽なことではないかと感じ、思い付きで私が仕掛けた話がこのような形で結実して、私としてもいささか嬉しく思った。

それにしても、石上露子の存在は、文学史上においても、また地元でも余り知られていない。挨拶に立たれた河南町長ですら、うかつにも最近まで露子のことを知らなかったと話された。郷土の文化人として、これからもっと顕彰していかねばと思つた。近年、富田林寺内町のこと知られるようになってきたのでよけいにその感を強くするのである。感銘深い歌碑除幕式に参列することができ、有意義だった。

歌碑除幕台風一過の秋の空  
露子歌碑秋陽の中に除幕され

平成二十一年十月八日

### 小板橋短歌会

加藤貴一  
（妻逝きて五年）

雨よ降り雪もまた降れわが涙涸れつきたれば天代り泣け

黒島和子

山茶花の剪定終えてすがすがしくれない深め年暮れむとす

奥野玲子

高貴寺に眠る露子に逢はむとて散りはじめたる紅葉踏みゆく

久保満夫

師走の夜明方ちかくふたご座の流星の群光尾をひく

多田さよ

顧みる人も少なくて時移り開戦記念日夕陽に暮れぬ

田口勝代

町会の回覧に使う舅の手作りの木札よこれ染みたり

村上悦也

芝氏らの露子を語る鼎談の聴衆に芝氏の孫も集ひて

（孫当時小学生）  
勝間さと子

いつしかに過ぎにし月日女と生れまさぐり學びひたに歩みし

右手和子

柔らかな陽ざしの届く珊瑚礁小鳥のように魚の群れおり

芝てる子

（西光院の三歳児）

秋陽さす大和路たずね西光院幼が木魚を叩き合掌す

高石志奈枝

参道に降り積む落ち葉踏みしめて幾度露子は御寺訪いけん

（高貴寺にて）

宮本正章著『石上露子百歌』

松本和男編著『石上露子文学アルバム』

松本和男編輯『石上露子研究第一輯から第九輯』など

富田林市旧杉山家住宅（重要文化財）に展示してあります。手にとってご覧いただくことができます。

問合せ先 ○九〇一三二八一 九二二七 事務局 大石



論集 石上露子



石上露子アルバム